

アメリカ合衆国の「大きさ」を実感する教材の開発

西加茂郡三好町立北中学校
山 北 淳

1 はじめに

現行指導要領では、世界地理が2年次の学習内容になった。1年次に日本地理を学んだ後に世界の国々のうちいくつかを選択して学習することとなったわけだが、多くの学校でアメリカ合衆国を題材として学習を行っていることと思われる。

日本との比較を行う上で、アメリカという教材のもつ1つの意義は、その「大きさ」ではないかと思われる。生徒は1年次に日本地理を学ぶ中で、我々の先人たちは、国土の多くが森林に覆われ、限られた平地をいかに効率よく利用してきたか、ということに気づくだろう。そして、その上でアメリカの広大さを知ったとき、様々な発展的思考が生まれてくるものと思われる。これまでも、企業的農業、ハンバーガーや飲み物のサイズ、校庭の広さなど様々なものを扱い、アメリカの広大さを学ばせている実践例が見られる。

そこで、日本で暮らしては気づきにくい、そんな新たな切り口から、アメリカ合衆国の「大きさ」を実感できる教材をつくることはできないかと考え、今回のプロジェクトに参加させて頂いた。

2 生徒の意識

本校の生徒がアメリカに対してどのような印象を持っているか調べたところ、ほとんどの生徒が「大きな国」と答えている。国土の広大さ、経済力・軍事力の大きさを意識している者が多く、中には移民を受け入れる懐の大きさを念頭において解答した者も見られた。しかし、知識としてその大きさを知ってはいるものの、実感として捉えることのできる者はあまり多くないという印象も受けた。

このようなことから、彼らの様々な既存の知識と比較することができ、驚きを与えられる教材の開発の必要性を強く感じた。そのような意味合いから、食べ物のサイズというのには有効な教材だと思われる。しかし、前述したように、これまであまり取り上げられなかったものを扱いたいとの思いから、「川」「水運」を取り上げることにした。

本校の学区には、境川という河川が流れている。三河と尾張の境となる川であるため、その名がつけられた川で、理科、総合学習でも境川の水質調査などが行われており、生徒の日常生活とも深くかかわっている。また、三好の地は愛知用水により、農・工業が発展した地でもある。社会科の地域教材を使い、「水」と自分の生活を考える経験も多く積んできている。そのようなことから、題材を設定した。

3 ミシシッピ川のもつ教材性

生徒がイメージしている「川」は日本的な、山から一気に海まで流れる、川幅も細い急流である。しかしアメリカの多くの川は、流量も豊富で、水源から河口まで長い距離を流れる。アメリカ人がイメージする「川」は、川幅も太く、ゆったりと流れる大河である。その代表となるのが、北アメリカ大陸を縦断する北米最長のミシシッピ川であろう。ミシ